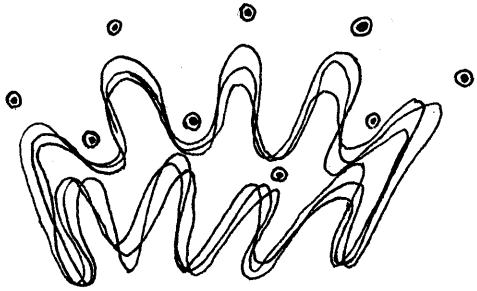
大きくなるということ

はるにれの会
宮里　暁美

3歳から4歳への、愉快な階段を、弟誕生というドラマを味わいつつのぼっていった啓吾。彼が、折にふれ言ったり行ったりしたことをふりかえってみながら、〈大きくなる〉ということについて考えてみたい。



▼手が届く▲

――寝る前に歯みがきをしていると、洗面台のところでふと思い出したというように「けいご、小さいときこんなだったんだよねー。」（しゃがみこんで洗面台に手が届かないふりをする）

「そうだね！」と私もその頃を思い出し、大きくなったもんだ、と思っていると、

「こんなにおおきくなってふしぎだね！　きっと、こうたもそうなるよ、たのしみだね！」としみじみと言う。

（4歳0か月）――

手が届く、ということは、成長の象徴ともいえる。啓吾はこの半年前、はじめて踏み台なしで洗面台に手が届いた。

「けいごおおきくなったよ！」と喜びの声をあげていた。

それから半年、もう今では楽々と手を洗い、顔を洗うことができる。

それがある日、ふっと思い出したのだろう。自分がまだずっと小さくて、手が届かなかった頃のことを。

小さいころの服を今の自分の体にあてて、いかに自分が大きくなったかを味わうのと同じように、彼は「小さくて手の届かない自分」というのをやってみる。そして、考えられないという風につぶやくのだ。ふしぎだねー、と。

大きくなった、というその事実を、彼は、小さかった自分の思い出に照らしながら確かめている。

▼耕太を抱く▲

ある日、電話をかけている私の視界の隅を思いがけない姿が横切っていった。

それは、生後2か月のようやく首がしっかりしはじめた耕太を抱いて（かかえて）そろりそろりと歩いている啓吾の姿だった。大きな声を出してびっくりさせたらよけいいけないと思い、息をつめて見送っている内に啓吾は目的を達し、耕太を床に寝かせた。それ以来、啓吾はいつも確信を持って耕太を抱いて歩く。

抱く、という行為もまた、「大きい」ということを実感させる行為なのだろう。

近所に1歳になるノンタンという女の子がいる。彼女は3人兄弟の末っ子なのだけれど、耕太にとても興味を示し寄ってくる。頭をなで、ほっぺたをさわって、そして、抱こうとする。自分が抱かれてきたように、今度は自分が抱こうとする。ようやく歩けるようになった彼女に、耕太が抱けるはずもないけれど、「アッコ、アッコ(だっこ)」と言って耕太の体に手を回し、おしりを振っているその姿全体から、「わたしのほうが大きい!」という叫びがきこえてくるようだ。

▲一人で出て行く▲

——今朝、「生協の牛乳を取りに下に(我が家は3階)行ってくれる?」と頼むと、(いつもは私と二人で行っている)

「うん、もうけいごは大きくなったもん、いける」と元気な返事。でも、また考えて

「ちょっとだけ寂しい…」「上から見てて、けいごーってよんでね。」などと言っている。まだ無理かな、と考えていると階段からにぎやかな声がきこえる。「あれ、なんか声がする!」とのぞいてみると、4階のゆうこちゃん、おさむくん兄弟がけんかをしつつ牛乳を取りに行くところだった。

おさむ君(一年生)に、「けいごも一緒に連れてって、けいごんち牛乳二つなの!」と頼むと「じゃあ、四つだね」と自分のうちの分と合わせて数を言いつつ、けいごを引き連れて牛乳を取りにでかけていった。(3歳8か月)——

我が家は、五階立てのマンション。鉄の重い扉が我が家と外界を仕切っている。ベランダには気楽に出て行けても、さて扉をあけて外へ、となるとまだ一人では行けない。行けそうだけれど、やっぱり不安。だから、「ちょっとだけ寂しい」と言い、「見ててね」と言う。

扉が閉まってしまうと家の中もお母さんの顔も何も見えない。庭があって路地があってという家並とはちがっ

て、こういうマンションゆえの不安感だとも言える。
だから、「一人で出て行けた時」それは大きな自信につながる、と私は思っている。
この朝、おさむ君に連れられて牛乳取りに行くことのできた啓吾は、それから、友達と一緒なら、あっちこっちと行けるようになっていく。そして、先日（4歳1か月）とうとう一人で、二つ隣の階段にいるじゅんちゃんの家にまで行ってくることができた。
彼は、こうして着実に「出て行く」体験を積んでいる。それでもやっぱり「ちょっと寂しく」て、どうしようかなーと考えたりしている。そうやって揺れながら、大きくなっている。

▼シャンプーをする▲

啓吾は水がこわい。水が顔にかかって目に入るのがいや。だけど、保育園でもプールをやるし、がんばろう、という気持はある。
だから、シャンプーする、と決めれば、かなり大胆にザバーッと頭に湯をかけている。
問題なのは、決めるまでの時間。
「きょうシャンプーするの？」
「そうねえ。した方がいいんじゃないの」
「えー！　なんでするの？　やだなー。」
その押し問答につきあえる時もあれば、めんどうくさくなって「ゴチャゴチャ言ってないのー」とどなりたくなる時もある。
しばらく放っておこうということで、四、五日シャンプーをしない日が続いた。夏でもあり、だいぶ汗くさい。それでも例のごとく、「きょうシャンプーするの？」ときいてきた。「しなくてもいいけど、くさいなー、りさちゃんが、くさいなーって、けいごのこときらいになっちゃうかもしれないよ」と言うと、途端にとても心配そうな顔になり、シャンプーすることに決めることができた。
それからも、遠足がうれしくてシャンプーしたり、いいことがあるとシャンプーしたりしているけれど、基本的には、やっぱりシャンプーは苦手。それが証拠に、保

育園で注射をした日に、私の顔をみるなり大きな声で言ったものだ。

「けいご注射したの！　だからオフロも入れないし、シャンプーもしれないの！」

どうやら注射の痛みもオフロ・シャンプーなしの魅力の前では目じゃなくなってしまうようなのだ。

それでも、保育園のプールでバシャバシャともぐっている年上の子ども達の姿を横目でみていて、彼はいろいろ思うところがあるようで

「あー、今日プールないといいなー」と言いつつも

「ケイゴね、こんだけ（4本の指を立てて、4歳ということ）になったらもぐれるんだよ。」と予言する。

そして今年の一月、めでたく4歳になった時、彼はちょっとあわてて言い直した。

「ケイゴね、こんだけになって、こんだけになったらおよげるんだよ。」

5本の指を両方合わせて10本、そのくらい大きくなるのはまだずーっと先のようで、啓吾はほっと一息ついていた。

▼自転車に乗る▲

街の中を自動車に乗った子ども達が走り回る。いつからだったのか、啓吾が自転車に乗りたい、と言い出したのは。

友達のしんや君の自転車の後に乗せてもらう。近所の友達の自転車を貸してもらう。

「あの木のところまで」という約束で自転車に乗った啓吾は必死でペダルをこいだ。約束の木を越しても彼はこぎ続け、「だめだよ」という声をふり払うようにこぎ続け、とうとう追いつかれて自転車をとり返されてしまうまで、彼はこぎ続けた。

残念そうに自転車を降りながら、彼は私の方をふり返り言った。

「けいご4つになったら自転車買うんだもんね。」

〝すぐ〟ではなく〝待つ〟ことも大切なように思えて「4つになったら」という約束をとりつけた。

「自転車＝4つ」と心の中でくり返していたであろう頃

に、こんなことがあった。

むこうから自転車に乗ったどうみても3歳前くらいの子がやってくる。啓吾はびっくりしたようにその姿を見送り、

「あの子、小さいのに乗ってたねー」とつぶやいた。

補助輪付き自転車は、ほとんど三輪車の感覚で乗られている現代なのだから、考えてみれば当然の姿なのだろうけれど、啓吾にとっては大きな驚きだった。

結局、上に住んでいるおさむ君のおさがりの自転車をもらうことになり、4歳より少し前に啓吾は自転車を手に入れたけれど、その時もまた印象的なことがあった。

おさむ君の家の玄関においてあった自転車をもらいに行くと、啓吾はうれしくて自分で持って階段を降りようとしたのだ。

自分のものという意識は、自分で持つということと同じなのだろう。耕太を抱こうとする気持と同じ流れがそこにある。

自転車をもらって数日後、啓吾は公園で知り合いに会うとしきりに後に乗るようにすすめていた。後に乗せてもらった経験が彼にそういう気持をおこさせている。

そしてたぶん、後に乗っていた小さい自分から、後に乗せてあげている大きい自分への転換を彼はイメージしているのだろうと私は思う。

3歳から4歳への愉快な階段をのぼったりおりたりして遊んでいる啓吾。彼が〈大きくなった〉という気持を味わったと思われる動きをあげてみた。

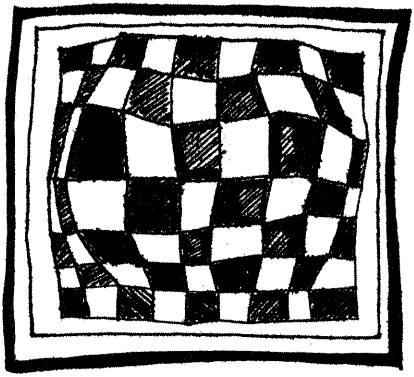
それは、手が届くことであり、耕太を抱くことであり、一人で出て行くことであった。シャンプーすることであり、自転車に乗ることでもあった。

そういう何気ない日々の暮しの中で、彼は、大きくなっていく自分を味わったり確かめたりしている。

私は、彼の〈大きくなる〉という気持によりそうことで、少しずつ未知な世界〈人間にとっての成長〉を垣間見させてもらっているような気がする。

子育ての楽しみが、また一つふくらんでいく。

最後に、啓吾がある朝、気分良く歌っていた歌を紹介して、今回のレポートを終ろうと思う。この歌の中には〈大きくなる〉気分がいっぱいです。

いちねんせいになったらね
しょうがくせいになったらね
いちねんせいになったらね
しょうがくせいに　いくぜ
おたのしみ
お・た・の・し・み
いちねんせいになったらね
あめもかって　いいぜ
いちねんせいになったらね
がっこうも　ひとりでいける
いちねんせいになったらね
おにいちゃんになったらね

（3歳6か月）